

# 横須賀市 市史資料 室通信3



発行日  
令和元年（2019年）6月5日

発行者  
横須賀市総務部総務課市史資料室  
住所 神奈川県横須賀市上町 1-61  
横須賀市立中央図書館内  
電話 046-822-2077

本誌は印刷発行をしていません。市史資料室の  
ホームページからダウンロードしてください。  
📧 <https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/8150/shishi/shishi1-top.html>

## 【手記】

### 友に代わりて青空を見る

東京都八王子市 村野宏子

昭和18年3月、東京市渋谷区宮代町（現・広尾）の日赤本社に私は出向いた。800名（？）近い受験者の内、合格者30人の中に選ばれたのである。日赤本社で発表された17番目に私の名前があった。嬉しかった。天にも昇る気持ちであった。

4月、日露戦役に衛生兵として出征した父と共に入学式出席のために日赤看護婦養成所（＝養心寮）の門をくぐった。現在の日本赤十字看護大学である。同期生は15人ずつ分かれ一つの部屋に入寮した。畳30枚位あり、机は部屋の真中に向き合せて並べであった。一人ずつ小さな押し入れがあり其の中に蒲団等を入れた。与えられた白衣に着替え赤十字の付いた帽子をかぶり看護婦姿になり、私達の養心寮の生活は始まった。朝6時起床。身支度を済ませ部屋を清め大きな食堂で食事を済ませ、講堂で養成部長殿の訓話を聞いた。訓話は赤十字精神の下に働く看護婦の心得であった。其の後、教室に行き人体に関するいろいろなことを学んだ。教師は軍医殿で、白衣を着、軍靴を足音高く教室に入ってくる姿に私達は背筋がぴんとし勉強に励んだ。

いちばん楽しかったのは担架訓練だった。広い運動場で担架をかつぎ患者に見立てた友を乗せて走るのである。私はその頃は痩せていたので「竹中、担架に乗りな」と友に言われいつも患者にさせられ担架に乗り、楽しかった。広い運動場を回って走る友

に代わり青空を眺め、担架に乗った私は眠気を感じるほどだった。

何か月か看護の勉強をした私達はいよいよ実習で（同じ敷地内の日本赤十字社中央病院の）病室勤務に行くことになる。私は第15、6号病棟の担当となった。その病室には（陸軍の）曹長以下の兵隊達があった。戦争で傷病兵になった兵隊達は白衣の袖に赤十字のついた着物を着せられ、16人位が一部屋でベッドに寝ていた。下士官は一部屋に一人である。婦長殿から私は下士官の病室に行くようにと言われた。入口の札に宗方曹長と書いてある。「失礼いたします」と頭を下げ入って行き、頭を上げると丸い目をした若い曹長である。「竹中と申します、お世話にまいりました」「宗方です、よろしく。竹中さん？もしかしたら竹中曹長の妹さん？似ている」「はい、そうです。竹中晋（すすむ）の妹です」。宗方曹長は熊谷陸軍飛行学校で兄と同期の人だった。兄の友達であるとは……。これは尚一生懸命看病しなければ、と心に思い、曹長の身体をお清式（せいしき）する為に蒲団をおろした。あっと心の中で驚いた。両方の足が切断されていたのだ。私は涙が出るのをこらえ宗方さんの身体を拭いた。毎日生懸命に看病した。次の勤務場所に移る時、涙が出た。私の話を聞いた晋兄は軍務の合間に宗方曹長に会いに行ったが、転送されていてもう居なかった。

勉強の為、いろいろの場所に実習に行った。その頃はクーラーなどない。軍医さんは汗だくになって手術した。その汗を拭くのが私達の仕事である。額から落ちる汗を「失礼いたします」と言ってタオルで拭いた。長い手術の時は大変だった。「竹中、こ

れを持ってアルコール室へ行きなさい」と言われ、膿盤(のうばん)の上に白衣を掛けたものを渡され、アルコール室へと向かった。アルコール室は病院の隅の方にある。長い渡り廊下に行く途中で、掛けてあった白衣がずれて切断された足が見えた。私は全身がふるえ夢中でアルコール室の係の人に渡した。

手術室の実習を終え2年生になった時、将校病棟に行くよう命ぜられ、私はそこの勤務に就いた。少尉、中尉、大尉が患者である。戦争で傷を受け一人部屋か二人部屋で療養していた。宗方曹長と同じく両足切断の大尉殿はいつも尺八を吹いていた。和歌も見せてくれた(くれ竹の葉末にさやぐ秋風にただ臥する身は涙なぐる)。

勤務は日勤夜勤と分かれていた。4月の或る日、大変なことが起きた。当日私は日勤で、午前中は包帯交換で、一方、婦長殿と卒業生の看護婦とは患者達を連れて処置室へ行った。残った私は、将校さん達の身体の様子を見る為、又は買物などの為、病棟を廻った。一部屋ずつ廻り、(脊椎損傷で背中をギプスで固めた)或る少尉殿の部屋へ行ったが、ノックしても返事がない。ドアを開けると、物凄い血しぶき、呻き声。「少尉殿」と呼べど、返事なし。震える足で婦長殿のいる処置室まで駆けて行った。あらゆる手当ての甲斐もなく25才の少尉殿は(自決して)あの世に行った。其の夜の夜勤を、婦長殿の命令で私はした。其の日の午後お母様から少尉殿に宛てた手紙が届いた。今一日早ければ、と思った。

一カ月過ぎ、結核病棟勤務となった。その頃の日本には結核に効く薬はなく開放療養だけだった。真冬でも全部病室の窓を開け新鮮な空気を入れるのが一つの治療法であった。ビタミン剤の皮下注射などもした。結核にかかると快癒することはない、と言われていた。其の後は外来勤務などをし、いよいよ日赤看護婦養成所を昭和20年3月に卒業した。

其の後、私は野比海軍病院<sup>1)</sup>に勤務することになった。病院は海のすぐ近くにあり、多勢の兵隊達が入院した。陸軍と違って海軍は食事が豊かだった。牛乳などは飲みきれない程も出た。日赤時代の友の石井はつが同じ病院であった。おかげで、勤務に馴れないながらも心強く感じていた。だが、其の石井が病気で勤務出来なくなった。診察の結果、腎臓が

腫れているとのことで、横須賀海軍病院<sup>2)</sup>で手術することになった。付き添いで行くようにと婦長さんから私は言われた。病院での手術でわかったのだが、腎臓は回復できない程すすんでいた。友の為の看病に日夜すごしていると、1945年7月18日の横須賀空襲。ものすごい爆音と共に隣の病舎に爆弾が落下した。思わず私は友を守った。石井の身体を自分の身体で伏せたのである。其の時、左足の大腿に痛みを感じた。アメリカの飛行機が落とす爆弾の破片が当たったのだ。血が滴り落ち、痛みが来た。衛生兵が来て担架に私を乗せ防空壕に運んだ。その壕は手術室まである大きなものだった。軍医は止血をし「この傷では破片が中に入っているかもしれない」と言ってレントゲンを撮ったが、破片は足の中に入っていなかった。歩けなくなった私は石井と共に担架に乗せられ、トラックで元の野比海軍病院に戻った。病院では石井と二人の病室が与えられた。松葉杖で身体を支えながら出来る限り友の看護をした。

8月の或る日、廊下に出た私に海軍の兵士が寄ってきて話してくれた。凄惨な爆弾が広島に落ちた、と。みんな人間が地上からいなくなるようだ、と。次は横須賀だよ、と。天皇陛下のお言葉があるからラヂヲの所に集まるようにと言われ、8月15日、集まった。「堪え難きを耐え、忍び難きを忍び」。私達は泣いた。全身が崩れ落ちるようだった。それから三日後、石井はつは私の手をしっかり握った後、この世を21才の若さで去った。私は大嶽婦長殿(『病院船』の著者大嶽康子の姉)の命令で実家に帰ることになった。松葉杖もなく跛の私を、海軍の兵士達が列を作り「竹中看護婦、退庁(たいちょう)!!!」と叫んで(顔の前方で円を描くように手を廻して)送ってくれた。久里浜から東京駅に着いた時、駅にぼつんと明かりが点いているのを見た。平和になったなあと感じた。駅には浮浪児が何人かいた。婦長殿からいただいた菓子や飴をこの子等にあげた。出来物の頭に包帯を巻いてやった。戦争は終わった。家に着いた時、門灯の明かりの下で咲く月見草の花が私をやさしく迎えてくれた。

平成30年9月2日、記。

☆☆☆

《付記》—— 市史資料室 佐藤明生

昭和20年7月18日。この日、横須賀市は最大の空襲に見舞われました。真珠湾攻撃の旗艦であった戦艦長門への砲撃が主たる目的とされますが、被害は横須賀軍港ばかりではなく、市中にも広がっていました。海軍は被害の実態を公表していませんが、後の聞き取り調査などで伏せられてきた被害の様子を窺い知ることができます<sup>3)</sup>。

今回、掲載した手記は、横須賀海軍病院が空爆を受けた事実を語るものとして、その実態を明らかにする貴重な記録の一つになります。

なお、本手記は、山口県の農村の一主婦が始めた個人通信『せせらぎ』第6号(平成31年4月1日発行)に掲載された村野宏子氏<sup>4)</sup>の玉稿を転載させていただいたものです。転載にあたり宏子氏のご子息である村野克明氏からは多大なご配慮とご協力をいただきました。

最後に、著者並びに克明氏、『せせらぎ』編集長福島みゆき氏のご厚意に感謝すると共に『せせらぎ』関係各位のご発展とご活躍を祈念いたします。

註

- 1) 横須賀海軍病院の野比分院として昭和16年6月に開院し、翌年に野比海軍病院として独立。病床数は横須賀海軍病院1,100床に対し1,400床と、横須賀鎮守府関係では最多であった。南に金田湾(東京湾外湾)が広がる臨海部に位置する(現、国立病院機構久里浜医療センター)。
- 2) 横須賀海軍病院は、明治13年2月に設置。震災後の大正15年3月、深田台(現、横須賀市文化会館周辺)から稲岡町に移転。昭和3年竣工の庁舎は、現在でも米海軍横須賀基地の病院施設として使用されている(1頁上端の写真=昭和初期発行の絵葉書)。この建築は、海軍建築局長の真島健三郎の柔構造論による我が国最初期の耐震建築として評価されている。
- 3) 高村聰史 2014 「米英海軍による空襲と横須賀」『市史研究横須賀』第13号 横須賀市
- 4) 大正15年4月28日生、93歳、東京都八王子市在住

参考文献

- 『新横須賀市史 別編・文化遺産』横須賀市2009  
『新横須賀市史 別編・軍事』横須賀市2012



横須賀海軍病院の一部(昭和初期の絵葉書)

## 市史資料室事業概要(平成30年度)

### 1 受付・問い合わせ件数等

- 問い合わせ件数 110件
- 資料利用・掲載許可件数 21件
- 資料(写真・絵葉書等)貸出・閲覧件数 6件

### 2 関連団体の研修会等参加状況

- 4月22日、日本アーカイブズ学会2018年度大会「アーカイブズとアカウントビリティ、他」(東洋大学白山キャンパス)〔藤川〕
- 5月17日、神奈川県歴史資料取扱機関連絡協議会(以下、略称「神史協」とする。)総会・講演会「公文書管理と情報公開／三木由希子」〔佐藤〕
- 7月26日、株式会社ニチマイ第15回アーカイブレコーディングセミナー〔内藤〕
- 7月27日、神史協第1回研究会「学び舎の記録遺産—学校資料の保存・活用を考える—」〔宮城・藤川〕
- 8月9日、神史協第1回研修会「海老名市の歴史資料の整理について、他」(海老名市)〔佐藤〕
- 9月26日、神史協第2回研究会「自治体におけるアーキビストの役割～『アーキビストの職務基準書』の検討から～」〔藤川〕
- 10月23日、神史協第2回講演会「アーカイブズに知る神奈川の地名／齊藤達也」〔宮城〕
- 11月30日、神史協第2回研修会「資料修復について講義・ワークショップ」(日本図書館協会)〔宮城〕
- 3月10～11日、第22回常民文化研究所古文書修復実習講座〔宮城〕

### 3 依頼業務・共催事業等

- 6月28日・7月5日、第2平成友の会、出前トーク「横須賀の日本遺産について」〔佐藤〕
- 2月7日～3月27日、「市史資料室所蔵資料ミニ展示会+関連図書展示」(共催：中央図書館)



中央図書館における市史資料室所蔵資料ミニ展示会の様子



4 寄贈資料 (寄贈者、敬称略)

- (1) 大矢部・島崎家文書(近世他) 192 点  
市内・島崎シズ
- (2) 佐々木親著『恩寵の体験』 市内・角井桂子
- (3) 津軽進水式記念プレート・横須賀海軍共済組合  
病院銘入り体温計 各1点 市内・川尻克巳
- (4) 鴨居・飯田家文書(近世・近代) 298 点  
市内・飯田法子
- (5) 野比・荒井家文書(近世・近代) 179 点  
市内・個人匿名
- (6) 池田町・川島家所蔵写真・図書等 23 点  
市内・川島和弥
- (7) 服部純昌氏所蔵海軍関係資料 7 点  
横浜市・服部政久
- (8) 藤原隆明氏所蔵海軍関係資料 6 点  
千葉県・藤原和美

5 図書寄贈者・団体等一覧 (五十音順、敬称略)

- ◇青森県県史編さんグループ ◇秋田県公文書館
- ◇女たちの戦争と平和資料館 ◇厚木市教育委員会
- ◇安城市教育委員会 ◇安祥文化のさと地域  
運営共同体 ◇飯田市歴史研究所 ◇市川市市史  
編さん事業担当 ◇市立市川歴史博物館 ◇伊能  
忠敬研究会 ◇海老名市教育委員会 ◇神奈川県  
立図書館 ◇神奈川大学日本常民文化研究所
- ◇株式会社ヨコソー ◇株式会社菜香 ◇鎌倉市  
中央図書館 ◇川越市立博物館 ◇木更津市教育  
委員会 ◇北九州市立文書館 ◇清瀬市市史編さん  
室 ◇呉市市史編さんグループ ◇神戸市文書  
館 ◇(相模原市)古文書を読む会 ◇相模原市立  
博物館 ◇佐倉市市史編さん担当 ◇諏訪市教育  
委員会 ◇世田谷区立郷土資料館 ◇仙台市博物  
館 ◇袖ヶ浦市郷土博物館 ◇茅ヶ崎市市史編さん  
担当 ◇茅ヶ崎市文化資料館 ◇豊田市教育委  
員会市史編さん室 ◇長野市公文書館 ◇日本キ  
リスト教会横須賀教会 ◇日本精工株式会社
- ◇葉山町郷土史研究会 ◇常陸大宮市教育委員会
- ◇姫路市市史編集室 ◇福岡市博物館市史編さん  
室 ◇藤沢市文書館 ◇町田市立自由民権資料館
- ◇三浦一族研究会 ◇三浦半島の文化を考える会
- ◇焼津市歴史民俗資料館 ◇大和市市史・文化財担  
当 ◇横須賀開国史研究会 ◇横浜開港資料館
- ◇横浜市史資料室

6 刊行物

- 市史資料室通信 第1号 平成30年9月7日
- 市史資料室通信 第2号 平成31年2月7日

7 事務執行体制の変更

	平成30年度	平成31・令和元年度
総務部長	藤井孝生	藤井孝生
総務課長	杉本道也	藤崎啓造
総務・庁舎管理係長	常盤 勝	—
情報公開係長	—	青山智行
(市史資料室)		
主任	内藤立成	内藤立成
再任用職員	佐藤明生	佐藤明生
非常勤職員	宮城 睦	宮城 睦
非常勤職員	藤川杏奈	藤川杏奈

【訂正】

市史資料室通信第2号「市史資料室所蔵の軍事関係資料及び民俗資料等の紹介」中、「1 旭日旗・手旗」において、「手旗」ではなく、凱旋門に突き刺した“小旗”であることがわかりましたので、以下のとおり訂正すると共に、令和元年(2019年)6月5日付けで市史資料室通信第2号を改訂(ver.2)しました。

(訂正前)

1 旭日旗・手旗

日露戦争戦勝後、その凱旋にあたり日本各地で凱旋門が建設された。横須賀における凱旋門の実態は詳らかではないが、戦勝を祝して海軍軍楽隊は演奏しながら町内を練り歩き、町民は提灯行列を催したという。こうした祝賀会の折々に振った手旗であろう。

(訂正後)

1 旭日旗・小旗

日露戦争戦勝後、その凱旋にあたり日本各地で凱旋門が建設された。横須賀における凱旋門の実態は詳らかではないが、この小旗は、逸見に建設された凱旋門に突き刺した装飾品であるという。その証拠に旗の軸の下方は斜めにカットされ尖っている。

あとがき

平成から令和への改元を記念して、中央図書館と市史資料室では、天皇関連の図書・資料の企画展示を行いました。当室は「市民が所蔵していた歴代天皇関連資料」展とし、明治・大正・昭和天皇関連の絵葉書を中心に写真、御名御璽など35点を展示しました(開催期間は、平成31年4月27日から5月26日まで)。

さて、市史資料室通信も第3号となりましたが、今号では、横須賀海軍病院が空爆されたことを明らかにする村野宏子氏の手記を転載という形で掲載しました。その他、平成30年度の事業概要を報告しました。

本誌は印刷発行せず、ホームページからダウンロードしていただく方式により無償で頒布しています。このたび、ホームページのアドレスの一部を変更しました。変更箇所は、URL冒頭のプロトコル(<http://> → <https://>)です。